

LLワークショップ

ICTを活用した「外国語教育」

「外国語教育におけるICT (Information and Communication Technology) の活用」をテーマにLL研究室(室長＝三浦弘文学部教授)の第10回ワークショップが12月8日、生田キャンパスで開かれ、55人が参加した＝写真。

早稲田大学／早稲田実業学校(中等部・高等部)非常勤講師の下山幸成氏が「ICTを活用した英語教育」と題して記念講演を行った後、授業実践報告では、フランス語担当の根岸徹郎法学部准教授が「大学教育における第二外国語と短期海外語学研修－フランス語のケースを例として」を、ドイツ語担当の西口拓子経営学部講師が「CALL教室を利用した外国語の授業の可能性」を発表したほか、2人の教員の発表が行われた。



自由見学では、10号館1階の情報コアゾーンに設けられたLL自習室の最新機器に関心が集まっていた。

07年度補正予算

学校法人専修大学の2007年度補正予算は、12月14日に開催された理事会・評議員会の議決を経て、別表のとおり決定した。

【1】資金収支補正予算 — 当初予算額との比較

〔概要〕 予算規模は、当初予算に比べ20億3069万円の増(当初予算比6.05%増)で355億8434万円となっている。

収入の部では、当年度収入合計が当初予算に比べ3億3780万円の増(当初予算比1.22%増)で280億2200万円。前年度繰越支払資金は、当初予算に比べ16億9288万円の増で75億6234万円となっている。

支出の部では、当年度支出合計が当初予算に比べ12億2730万円の増(当初予算比4.39%増)で291億9186万円。次年度繰越支払資金は、翌年度の収入となる前受金収入を含み、当初予算に比べ8億339万円の増(当初予算比14.37%増)で63億9248万円となっている。

【2】消費収支補正予算

〔概要〕 消費収入の部では、帰属収入合計(学校法人の負債とならない収入)が当初予算に比べ9億4436万円の増(当初予算比3.71%増)で264億30万円。基本金組入額合計が当初予算に比べ4億9239万円の減(当初予算比19.84%減)で19億8986万円。消費収入の部合計は、当初予算に比べ14億3676万円の増(当初予算比6.25%増)で244億1044万円となっている。

消費支出の部では、消費支出の部合計が当初予算に比べ18億9620万円の増(当初予算比7.51%増)で271億3969万円となっている。

当年度消費収支差額は、当初予算に比べ4億5943万円の増(当初予算比20.24%増)で27億2925万円の消費支出超過額となっている。前年度繰越消費支出超過額(138億4897万円)を加えた翌年度繰越消費支出超過額は、当初予算に比べ8億1804万円の減(当初予算比4.70%減)で165億7823万円となっている。

自然科学研究所第10回公開講演会

“地球環境の変動” 3講座編成で解説

自然科学研究所主催の公開講演会が12月15日に生田キャンパスで開催された。研究所の発足以来、10回目となった今回は「環境の変動とそのタイムスケール」をテーマとし、異なる時間軸で変動する、地球のさまざまな環境についての3講演が行われた。



まず、佐藤暢経営学部准教授が「海底から大陸の変動を知る」と題して、数億年かけて生じる大陸分裂と現在の海底の岩石との関係を紹介した。次に、苅谷愛彦文学部准教授が「身近な地形から環境変動を知る」と題して、生田緑地の地形や地質を例に、最近数十万年間の関東地方の地形や気候の変動を紹介した。最後に、高岡貞夫文学部教授が「樹木の年輪から環境変動を知る」と題し、年輪から推定する過去の山火事の発生状況と環境変動についての研究成果を紹介した。

参加者は、教職員、学生、一般など学内外から100人を超え、今後も研究成果の発信を積極的に行ってほしい、などの感想が寄せられた。

高大連携

●ひばりが丘高校「一日体験入学」

神奈川県立ひばりが丘高等学校(加賀大学・校長)の国際教養コースの2年生39人が参加して12月10日、生田キャンパスで行われた。オリエンテーションガイダンス、模擬授業、学生引率のキャンパス探検などのほか、留学体験学生による寸劇を交えた国際交流プログラムもあり、有意義な大学体験をした。



●附属フェスティバル

東京都専修大学附属高等学校(鈴木高弘校長)の2年生402人が参加して12月15日、生田キャンパスで開かれた。

オリエンテーション、学部学科専攻説明、模擬授業のあと、専修大学の付属高校出身の在学生たちで構成する「Hi・Yo・Coの会」が企画した学生生活紹介のトークショー「専大のランチ」が行われ、好評を博した。



●修了式

1月12日、生田キャンパスで高大連携聴講生の修了式が行われ、授業を通年もしくは半期聴講した高校生7人(2人欠席)に修了証書が交付された。



≪専修人の新しい本≫

詭弁的精神の系譜

高橋 勇夫 著

文学の言葉が意味への懐疑を捨てず、なおかつ意味を担い直そうとすれば、その振る舞いは時に分かりにくく、見苦しくさえ映る。そのような困難を意識する文体、いや、困難それ自体をも表現しようとする文体は、多かれ少なかれ「詭弁(きべん)的」にならざるをえない。

意味から逃走し、そのくせ意味の不在に苦しむ芥川龍之介、近代日本の嘘を「詭弁」によって退ける永井荷風、必死の「お道化」で当座を取り繕い続ける太宰治、左も右も「日本主義」に走り始める時代に自虐といかがわしさの限りを尽くし「畸形(きけい)」的な文体で辛くも空虚と対峙(たいじ)し続ける保田與重郎…。

その他、同主題の展開をピンチョン、ペロー、メイラーなどのアメリカ小説にも見いだしている(彩流社・本体2800円+税)。

著者(たかはし・いさお) = 法学部准教授。担当は英語。

